

袖紫ヶ森の神々



蒲神明宮



蒲神明宮

かば しん めい ぐう

国史現存

こくしげんぞん

蒲大神

かばのおおかみ

ごしんま



縣 社 蒲 神 明 宮



此社は其内神にして吾國守備の聖域なり文書に記述も少く其を祀る者亦少く其に修葺高き石塔に修葺高き石塔を有し地方有数の大社なり

(伊藤村 蒲神宮 鳥居) 日正十月十祭例 伊藤大田又 神祭例
伊藤北で

蒲神明宮鳥居：AIで修正する前の画像



蒲神明宮鳥居・大正末期

『現存国史 蒲大神』

「現存国史」とは、六国史（日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、日本文徳天皇実録、日本三代実録）などの公的な歴史書にその名が記され、かつ**現在も存続**している神社であることを指す。

蒲神明宮の祭神や由緒に関連する、国史上の主な記述

1. 蒲大神の叙位

『日本三代実録』において、蒲神明宮（当時は蒲神、あるいは蒲大神）への神階奉授の記録が確認できる。

これらの記録は、平安時代初期において、同社が朝廷から重要視されていた「国史見在社」であったことを裏付けている。

2. 「国史現存」の意義

蒲神明宮が「国史現存の社」と呼ばれるのは、1,100年以上前の公的な歴史書に名前が登場し、その信仰が途絶えることなく現代の神社へと継承されている為。これは、同社が平安時代初期にはすでに朝廷から注目される有力な神社であったことを証明している。

3. 歴史的変遷

かばのみくりや

蒲 御厨：平安時代末期、この地域は伊勢神宮の荘園（御厨）となった。

かばのかじゃ

蒲 冠者・源範頼：源頼朝の弟、範頼は、この地で育ったことから「蒲冠者」と呼ばれた。

現在の姿：その後、伊勢神宮から勧請され、内宮（天照大御神）と外宮（豊受比売神）を祀る「神明宮」となり、現在も20年ごとの式年遷宮が続けられている。

※「国史見在社」

奈良・平安時代の歴史書「六国史」に名前が見える神社のこと。朝廷から尊崇され格式の高い神社として扱われた。



植松町・東海道沿いの蒲神明宮「一の鳥居」



「蒲大神」石碑 明治27年



『蒲神明宮縁起誌』

遂江大掾静並者越後國人也或耽詰
 伊勢大神宮伏祈子孫之繁栄又于
 從社内來而超静並符衣左袖上願
 入社内於静並見持衣袖有蒲開本願
 主之六字静並悚然謂正是靈驗之所
 為也然不知蒲之義問諸國參詣者
 曰有蒲云處耶否答曰未知昔從遠
 州飄風重沙漸成于瀉其有淤泥所
 也生故名曰蒲静並又問曰其於蒲里
 草福田地耶否答曰蒲静並又問曰其於蒲里
 者從伊勢直到遠江國蒲村其於蒲里
 並而然故稔自越後住遠江國蒲開成
 果而然故稔自越後住遠江國蒲開成
 村里之溝上土畷二分東方西方近鄉
 之住民等皆稔于蒲静並素所以寛仁
 而廣愛衆民也其右益闕田畠而東
 方十二村並每歲詣天照大神宮或耽
 村也又静並每歲詣天照大神宮或耽
 於神前敬曰我每歲詣天照大神宮或耽
 國或罹世路或有障難遂參詣只願
 勸請神夜蒙正像之示現故建我神所
 希也其神夜蒙正像之示現故建我神所
 於蒲神御厨靈驗益盛國人崇仰
 之自是達明御厨靈驗益盛國人崇仰
 數千石之養田且經營神社而寄附
 有官命被經營且經營神社而寄附
 因越後守静並者大職冠鎌足公抄
 録目之末裔也旧神官蒲氏從家譜抄

この蒲の地は、「蒲草」の生い茂った肥沃な水郷地帯であったと伝えられ、これが地名に発展したものと思われる。このことは、「蒲神明宮縁起誌」に次のとおり記録されている。（「大掾」は官名、姓は藤原）

遠江大掾^{だいじょう}静並は越後の国の人で、ある日伊勢大神宮に詣で子孫の繁栄を祈っていると、小蛇が社殿より出て来て、静並の着物の左袖の上を乗り越えてまた社殿に帰っていった。静並が不思議に思って袖を見ると「蒲開発本願主」の六文字を読み取る事ができた。これは神のお告げに違いないと思ったが、「蒲」が何を意味するのか分からなかったので、周りにいた全国よりの参詣者に尋ねたところ、遠州からの参詣者が「蒲」とは土地の名前ではなかろうか、私の国は昔は海の中にあつたが、風が砂を運び干潟となり、そこに蒲草が生い茂っているので「蒲」と呼んでいると答えた。静並は重ねて、そこは肥えた土地なのかと質問すると、よく肥えた所だと返答したので、静並はすぐに伊勢から、その人と連れ立って「蒲」に行ってみると、まさに肥沃な土地が広がっていた。

そこで静並は、越後からこの「蒲」に移り住み開拓を始め、広大な土地に用水路を作り、東方、西方の二つに分け水利の便を図ったため、近在の人々もだんだん集まり、開墾も進み東方十二か村、西方十二か村の二十四郷四十二か村が誕生した。また、静並は毎年天照大神宮に参詣していた。しかし、できれば毎月参詣したいと思っていた。道も遠く道中も難儀なので、我が里に御分霊をお迎えし毎日お参りしたいとお願いした。するとその夜 大神が現れ望みを叶えようとお告げがあつた。そこでの地に神社を建て、御厨と言うようになった。里人は、大神の御加護により崇敬の念をますます深め、数千石の美田を伊勢神宮に寄付し、蒲氏（静並の子孫）が代々神社をお守りすることとなった。

ここに記す通り、越後守静並は、大職冠・原鎌足公から数えて十代目の末裔である。これは、旧神官である蒲氏の家譜から抜き出した記録である。

『ガマ』

ガマ(蒲、香蒲) ガマ科ガマ属

北海道・本州・四国・九州の、池や沼などの水辺に生育する多年草。

丈は 1.5-2m。地下茎は横に伸びる。葉は幅 1-2cm の線形で、厚くて無毛。基部は鞘状になって茎を抱く。茎の先に円柱形の花穂をつけ、下部は雌花穂で長さ 10-20cm、そのすぐ上に雄花穂が接して付く。

雄花穂は雌花穂より細く、長さ 7-12cm。花粉は黄色で、4 個ずつ接合している。

雌花穂は始め径約 6mm だが、果期には子房の柄と花柱が長く伸び、直径 1.5-2cm になる。

花期は 6-8 月。果実は堅果、綿クズのような冠毛を持つ。



袖紫ヶ森に祀られている神々



祭礼は10月中旬



祭礼は2月上旬

祭礼は10月中旬

祭礼は2月上旬



祭礼は5月中旬



祭礼は1月下旬



祭礼は7月上旬



蒲神明宮：大正時代

御祭神 古来、社殿はない

『蒲大神』



御祭神 神明宮

『内宮』



御祭神 神明宮

『外宮』



御祭神 神明宮

いざわのみや 『伊雑宮』

伊雑宮



御祭神 神明宮

たかのみや
『高宮』



御祭神 神明宮

つちのみや
『土宮』



御祭神 末社

にしのみや
『西宮』

西宮





滌神神明宮境内（大正末頃撮影）



西宮神社旧風景（昭和44年春撮影）

御祭神 末社

『津島神社（天王様）』



御祭神 末社

いつくしま
『巖島神社 (弁天様)』



御祭神 末社

はらえど
『祓戸稻荷神社』



祓戸稲荷神社



御祭神 末社

『五社稻荷神社』



五社稲荷神社



『秋葉神社』



秋葉神社

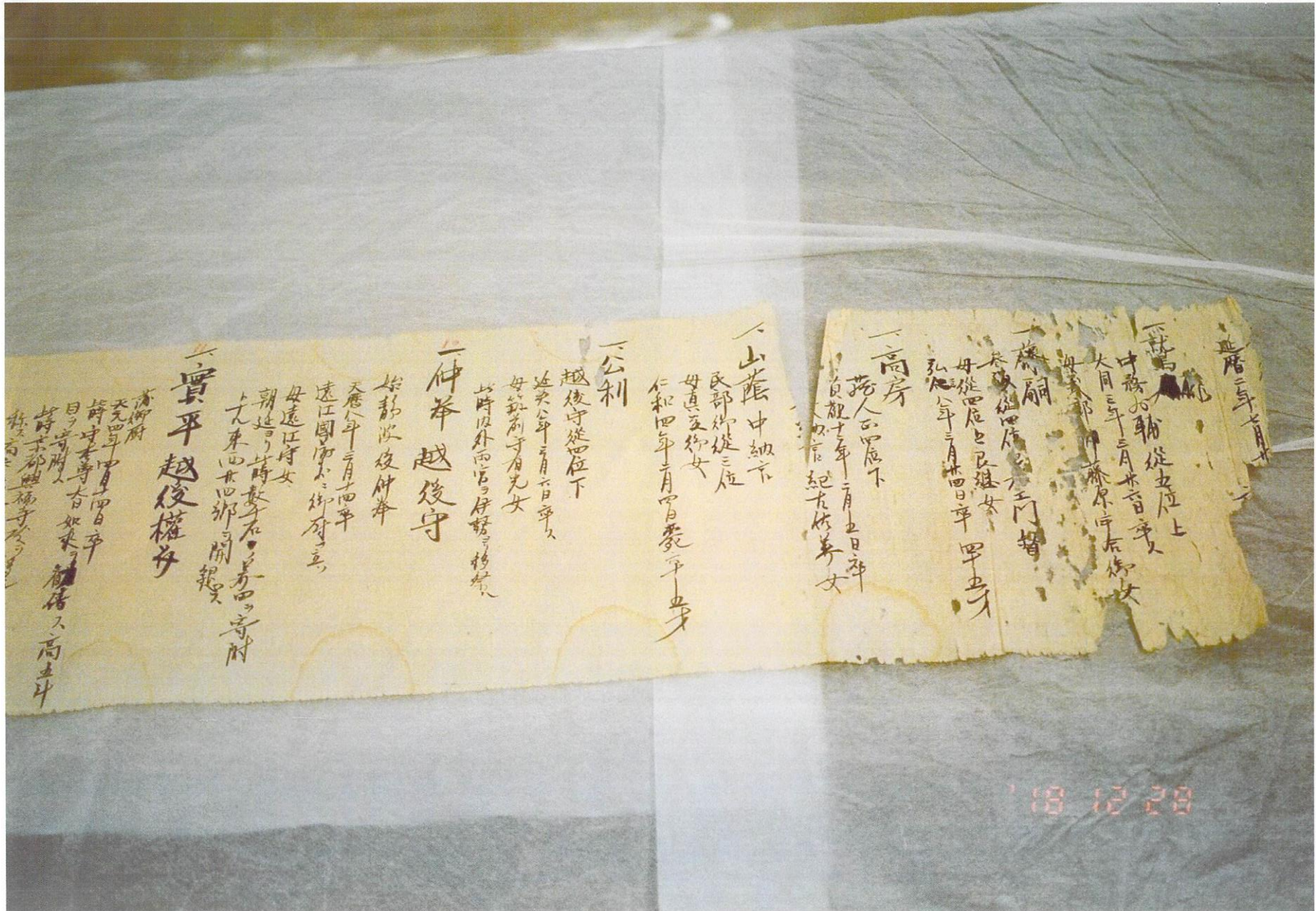


御祭神 摂社 大蒲町鎮座

『八柱神社』



『蒲家歴代氏名 5代~11代』 古文書



延暦三年七月廿

一 藤原 從五位上

中務少輔 從五位上
大同三年三月廿五日卒
母 藤原 藤原 守直 女

一 藤原 從五位上
母 從五位上 藤原 守直 女
弘和元年三月廿四日卒 甲子

一 高房 從五位下
母 從五位下 藤原 守直 女
貞觀十年三月廿五日卒

一 山蔭 中納言
母 從五位上 藤原 守直 女
仁和四年三月廿五日卒

一 公利 從五位下
母 從五位上 藤原 守直 女

一 仲奉 越後守
母 從五位上 藤原 守直 女
延和元年三月廿五日卒

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
天曆八年三月十四日卒

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
遠江國守 藤原 守直 女

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
朝延 藤原 守直 女

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
大東 藤原 守直 女

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
朝延 藤原 守直 女

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
天曆八年三月十四日卒

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
目 藤原 守直 女

一 實平 越後權守
母 從五位上 藤原 守直 女
藤原 守直 女

18 12 28

『蒲家歴代氏名 5代~11代』

五代 鷲取

六代 藤嗣

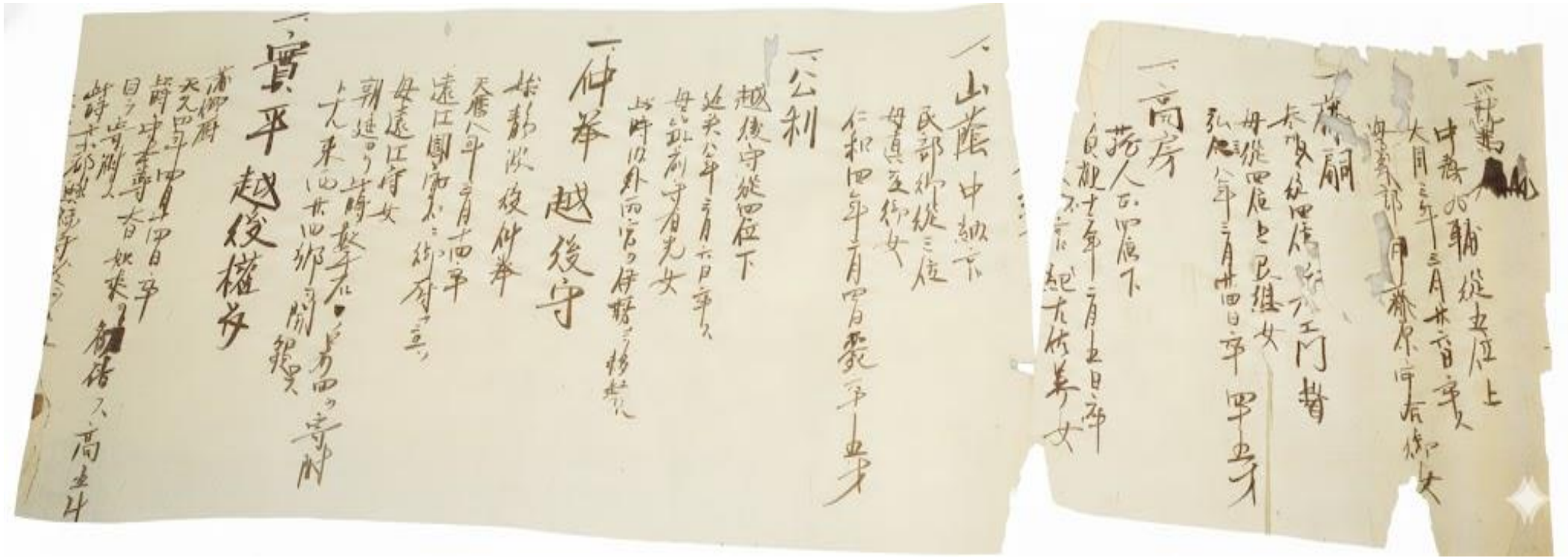
七代 高房

八代 山蔭

九代 公利

十代 仲拳

十一代 実平



『蒲家歴代氏名一覧表』

代数	氏名	没年（和暦・西暦）	備考
1	鎌足	天智 8年（669）	大職冠
2	不比等	養老 4年（720）	太政大臣
3	房前	天平 9年（737）	太政大臣
4	魚名	延暦 2年（783）	左大臣
5	鷲取	大同 3年（808）	中務少輔
6	藤嗣	弘仁 8年（817）	参議
7	高房	貞観12年（870）	越前守
8	山蔭	仁和 4年（888）	中納言
9	公利	延喜 8年（908）	越後守
10	仲拳	天曆 8年（954）	静並 蒲御厨主
11	実平	天元 4年（981）	静並 広福寺建立
12	惟躬	寛弘 7年（1010）	静並 広福寺建立
13	成光	康平 2年（1059）	静並 広福寺建立
14	眉子	応徳 3年（1086）	婿貞光 源姓賜る
15	清宗	太治 元年（1126）	検校職
16	清房	康治 2年（1143）	相模権守
17	清良	平治 元年（1159）	越後権守
18	清成	建仁元年（1201）	越後守
19	清倫	建仁 2年（1202）	検校職
20	吉祥子	建永 元年（1206）	源範頼の室
21	藤姫	宝治 2年（1248）	閑検校職
22	神常	弘安 9年（1286）	検校職（清永）
23	清行	元弘 元年（1331）	検校職

代数	氏名	没年（和暦・西暦）	備考
24	清保	延文4四年（1359）	〃
25	清英	永徳 3年（1383）	〃 藤原姓に戻る
26	清和	応永24年（1417）	〃
27	清範	応仁 元年（1467）	〃
28	範道	文亀 2年（1502）	〃
29	範宗	天文19年（1550）	〃
30	清常	天正 4年（1576）	（清庵）
31	清成	天正14年（1586）	〃
32	清秀	寛永17年（1640）	〃
33	清頼	寛永12年（1635）	〃
34	清安	寛文 5年（1665）	〃
35	清実	延宝 5年（1677）	〃
36	清平	享保 6年（1721）	〃
37	清兼	宝暦 元年（1751）	〃
38	清詮	天明 7年（1787）	〃
39	清敏	文化12年（1815）	〃
40	清次	文政13年（1830）	〃
41	清澄	明治 8年（1875）	惣検校
42	清憲	大正 6年（1917）	啓次郎 祠官
43	清近	昭和19年（1944）	堅次 宮司
44	旦	昭和54年（1979）	（あかす） 禰宜
45	貴文	昭和35年※誕生	

『式年遷宮』令和2年(2020年)催行

20年ごとに社殿を新しくし、ご神体を移す儀式で多くの氏子などによるご寄付により今もなお続く貴重な行事。

「行事一覽」

9月15日(火)

浜垢離

中田島海岸にて大祓の儀式(身を清める儀式)

9月16日(水)

午後5時 祓戸稲荷神社へ 大祓の儀式

午後6時 正遷宮祭 暗闇の中で御神体、御神宝を仮殿から本殿に御移しした。

夕方から始まった儀式は厳かに進み、日が落ちて真っ暗の中、無事にご神体が新しい本殿に遷された。

昭和55年(1980)、平成12年(2000)過去の式年遷宮では屋台が並び崇拝者など3,000人以上集まる大行事だが、今年はコロナ禍の影響で神社関係者と総代、工事関係者のみの参加で縮少となった。

2020年度の式年遷宮では外宮本殿を新調し、伊勢神宮から譲り受けた「月読宮」の鳥居を外宮本殿の前に建立した。

旧外宮本殿、神門は元魚町の松尾神社へ移築した。

僅か3ヶ月の短期間にも拘らず各町の遷宮委員をはじめ、総代各位が一致協力していただいたお陰で、約2,800余の皆様から1,900万円以上の御奉賛を賜りました。誠にありがとうございました。

式年遷宮は悉皆改築が原則です。昭和15年(1940年)は内宮・外宮・拝殿・社務所・第一鳥居・第二鳥居を改築した。しかしながら、近年では悉皆改築は諸般の事情によりでないが御神体は必ず新調している。

蒲神明宮古資料集(蒲神明宮文書)に残るご遷宮の記録は建長6年(1254)に始まり現在に至っている。

『伊勢神宮の神木のお木曳き』昭和 35 年遷宮時
植松町一の鳥居



『式年遷宮 1』 令和2年（2020年）9月16日



祓戸^{ほろえど}稲荷神社へ向かう



神門

『式年遷宮 2』 令和 2 年（2020 年）9 月 16 日

外宮本殿



うぶぎぬ
『初生衣神社』



織殿（修理前）



織殿内の御神宝

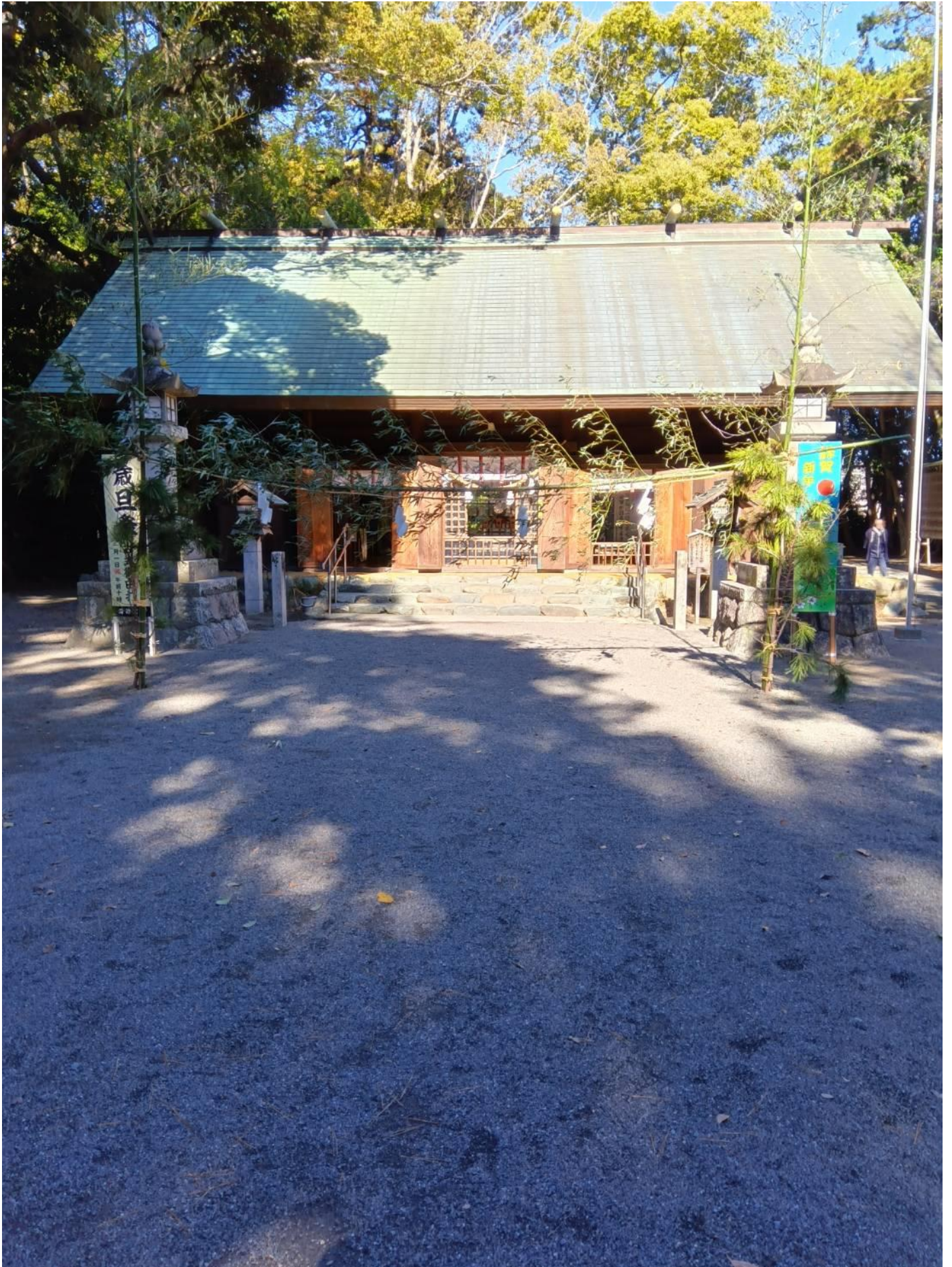
『伊勢神宮 月読宮』



令和2年(2020)の式年遷宮に合わせて、先の伊勢神宮の式年遷宮で下賜された月読宮の旧鳥居を、蒲神明宮の外宮鳥居として再建している。



『蒲神明宮 門松』



おんたう まつり
『御田打ち祭』

「^{さいたんさい}歳旦祭」は元旦（1月1日）に執り行われる、新年の始まりを告げるお祭り。
当日は神前で稲作の全工程（田おこし、種まき、田植え等）を模擬的に演じ、
その年の五穀豊穰を祈願する「御田打ち祭」も行われる。



『御田打ち』

11111111111111111111

浜松地域遺産

256



認 定 書

(所有者)

浦神明宮 様

下記の文化財について、浜松地域遺産として認定いたします。

今待とも地域の宝として大切に維持され、地域文化の創造に活用されていくことを期待いたします。

記

認定文化財の名称	浦神明宮の御田打ち
員 数	—
所在地	浜松市東区仲立町
文化財の種別	無形民俗文化財
認定の理由	地域の歴史を示す無形民俗文化財として貴重であるため

令和2年3月23日

浜松市教育委員会



きねんさい
『祈年祭』



「祈年祭」は春の耕作始めにあたり、五穀豊穰を祈るお祭りで、「としごいのまつり」とも呼ばれます。「とし」とは稲の美称であり、「こい」は祈りや願いで、お米を始めとする五穀の豊かなみのりを祈ることを意味する。稲の育成周期が日本人の一年といえる。

『焼納祭』

焼納祭とは、神社などで古いお札やお守り、正月飾りなどを感謝を込めてお焚き上げ（火で焼く）する神事のことです。「お焚き上げ」や「どんど焼き」とも呼ばれ、新年を清め、一年の無病息災や豊作を願う火祭りの一種。



『浜垢離』

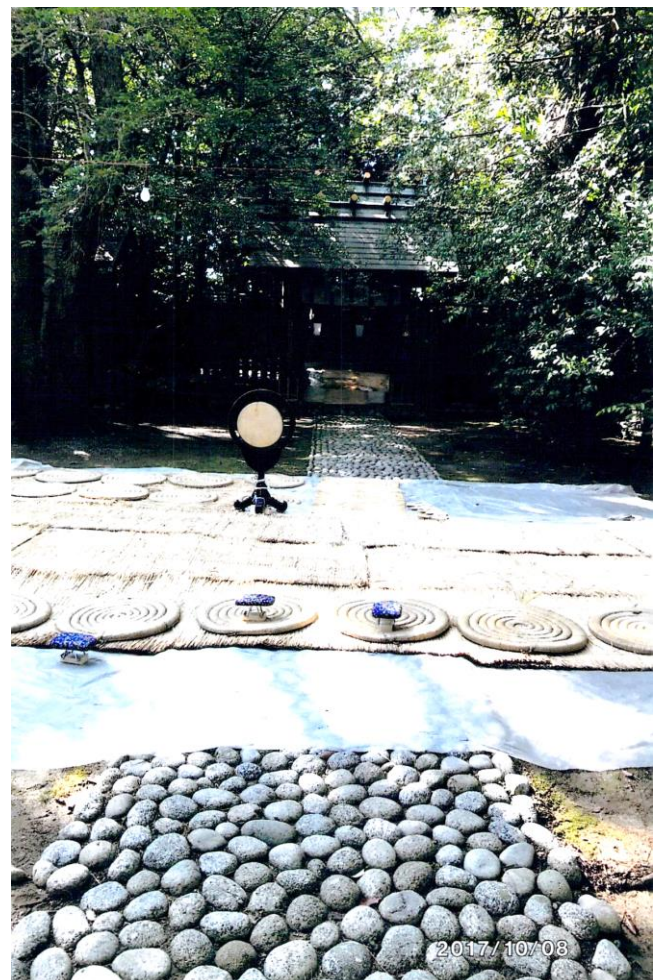
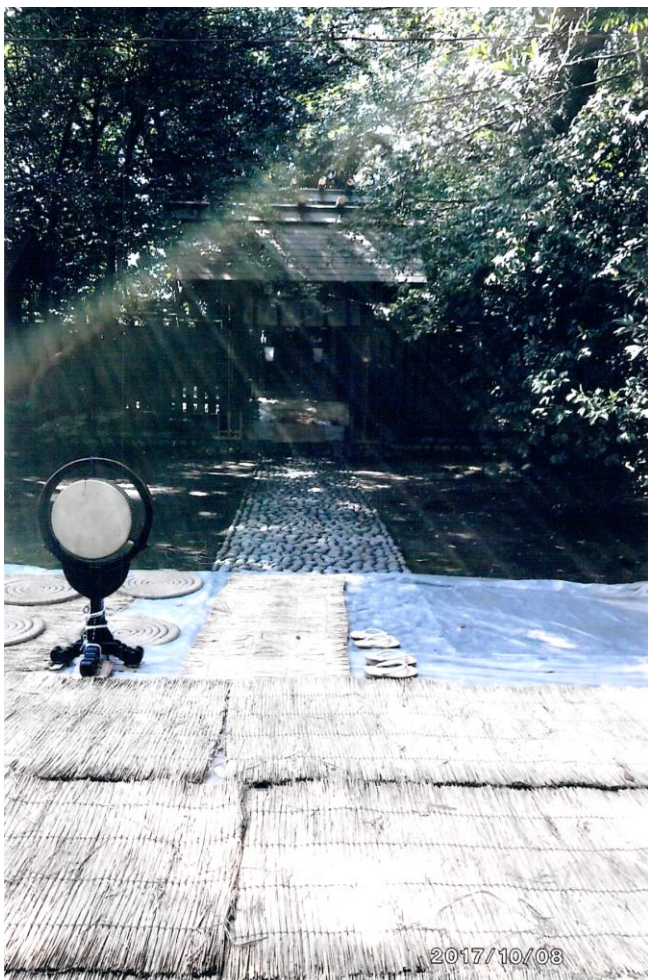


2015/10/09



2015/10/09

『庭上座礼』 開始前





『庭上座礼』 御神楽奉納



平成23年度蒲神明宮例大祭

庭上座礼

『庭上座礼』

(表3の様式)

浜松市教育委員会

259



認 定 書

(受審者)

浜神明宮 様

下記の文化財について、浜松地域遺産として認定いたします。

今後とも地域の宝として大切に維持され、地域文化の創造に活用されていくことを期待いたします。

記

認定文化財の名称	浜神明宮の庭上座礼
員 数	—
所在地	浜松市東区神立町
文化財の種別	無形民俗文化財
認定の理由	地域の歴史を示す無形民俗文化財として貴重であるため

令和2年3月23日

浜松市教育委員会





『庭上座礼』 御神楽奉納
(雨天時)





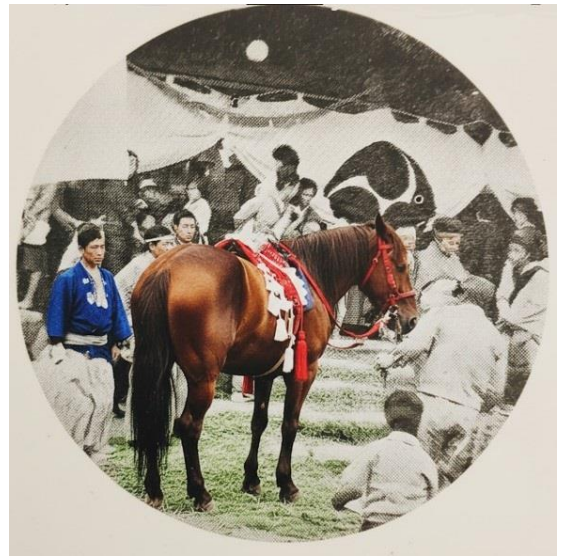
『庭上座礼』 御神樂奉納
(雨天時)



『蒲神明宮例大祭』

蒲御厨二十四郷の村の総社として建立された蒲神明宮。10月の例大祭には各町から10台の屋台が繰出し境内に勢揃いし、氏子の中から選ばれし童女たちによって神楽が奏上され、神馬神事、投餅が行われる。かつては、境内では、弓の競射会が奉納され、技を競っていた。天狗を先頭に美しく着飾った供を引き連れた神輿が大蒲の八柱神社まで巡行したとも言われ、また、湯立神事も行われていたようだが、今は途絶えてしまった。

以前の例大祭は10月15日、16日であったが現在は当り日の前の土日に行われる。



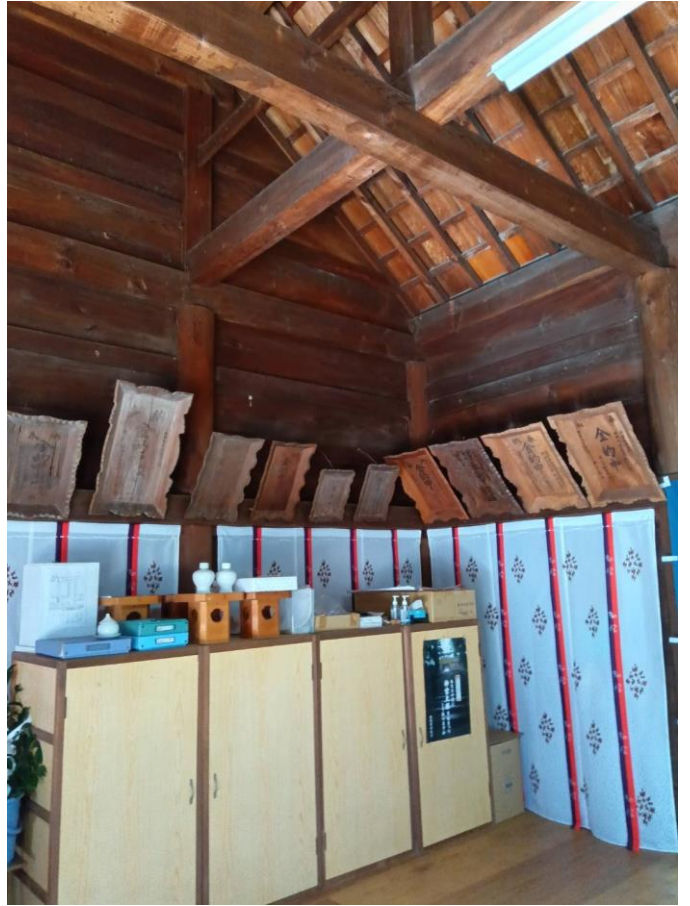
神馬神事



天狗（猿田彦大神）



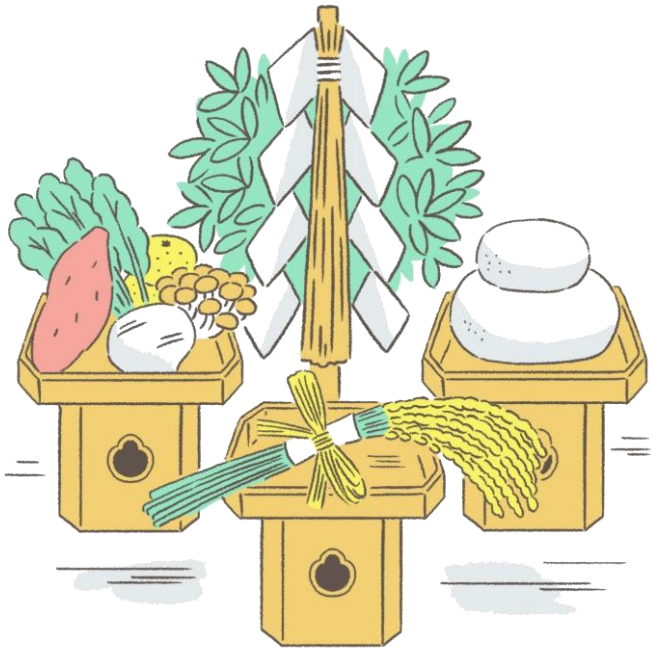
『蒲神明宮奉納 弓の競射会』



『蒲神明宮 例大祭』



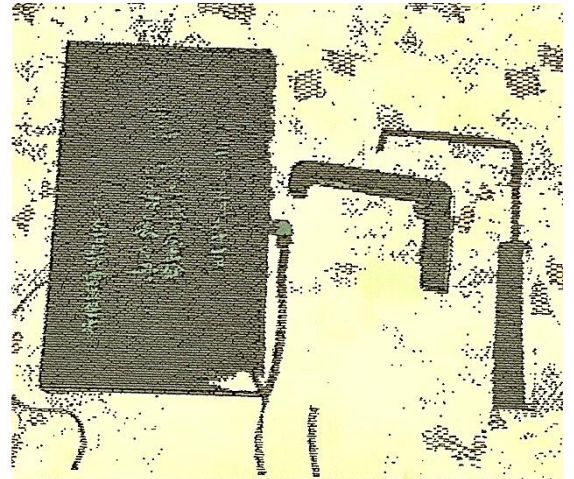
にいなめさい
『新嘗祭』



「新嘗祭」は「しんじょうさい」ともいい、「新」は新穀を「嘗」はお召し上がりいただくことを意味し、収穫された新穀を神に奉り、その恵みに感謝し、国家安泰、国民の繁栄をお祈りする。

『風神の御鍵(立田の御鍵)』

天正16年(1588) 戊子7月7日巳の刻のことであった。白の衣を着た人が、蒲家を訪れた。「我は伊勢の風神の使いなり」と名乗り、懐より白紙二重包の物を取り出して、当主清秀に渡し「これは、天照大神が、あなたに授ける品である。これを家宝として大切にしまっておき、今日より3日の後に開いて見なさい。そして、蒲家に伝わる古い書類と蒲家の系図を持って伏見の豊臣秀吉の所へ願い出れば、神領はもとの通りになるであろう。疑うことなかれ」と告げた。清秀は不思議に思い名前を尋ねると「私は、伊勢の風神の使者で、名は薩摩である」と答え、願いが成就したならば必ず伊勢神宮に参拝しなさいと云って門を出ると姿が消えてしまった。



風神の御鍵

実はこの頃、豊臣秀吉が天下を統一、全国の神社、仏閣の領地を悉く没収してしまい、創建以来蒲御厨として、蒲24郷の6480石という広大な地域を領有してきた蒲神明宮も例外となり得ず、すべての領地を没収され、貧困のどん底におちいって、神社の経営もままならぬ状態であった。蒲家21代大蔵丞検校職藤原朝臣清秀の時である。

清秀は、教えられた通り3日後その包みを開けてみると、蔵の鍵が入っていた。その後、云われた通り書類一切を持って伏見の秀吉のもとに行き、領地を帰して欲しいと願い出た。秀吉はその古文書を詳細に調べた後、改めて神領として260石を寄付して呉れることとなった。

清秀は大変喜び、これはまさしく伊勢神宮のお陰に違いないと、直ちに伊勢に行くと、先頃の薩摩の姿を見かけ、大急ぎで声を掛けたが見失ってしまった。

神宮にお礼の参拝の後、神主に面会し、薩摩が蒲家を訪れ、彼のいう通り秀吉のもとに願い出た一部始終を話すと、神主は大いに驚いて、伊勢神宮では、いつの間にか「風神の御鍵」が紛失し探しているところだと答え、なんとも不思議なことだ。これも神様の思し召しであろう。以後は「風神の御鍵」を蒲神明宮で大切に保管しなさいと述べたとのことである。

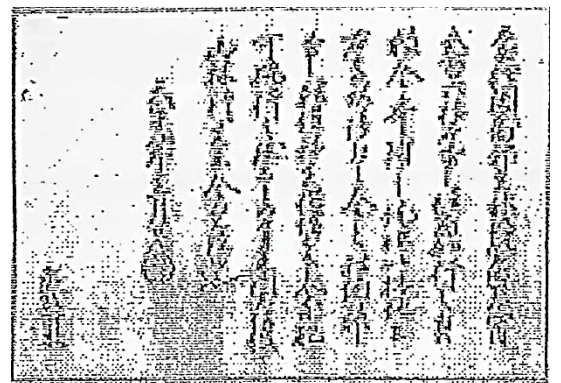
秀吉朱印状

この秀吉の寄付した神領の260石は、朱印地として徳川幕府に引き継がれ幕末まで存在したが、明治維新により再び政府に没収されてしまい。蒲神明宮の経営は蒲家の手を離れ、氏子に委ねられる事になった。

風神といえば、奈良県の竜田神社が有名で、その風鎮祭は、風による災害を静め、収穫を豊かにする祭りとして古くから知られている。

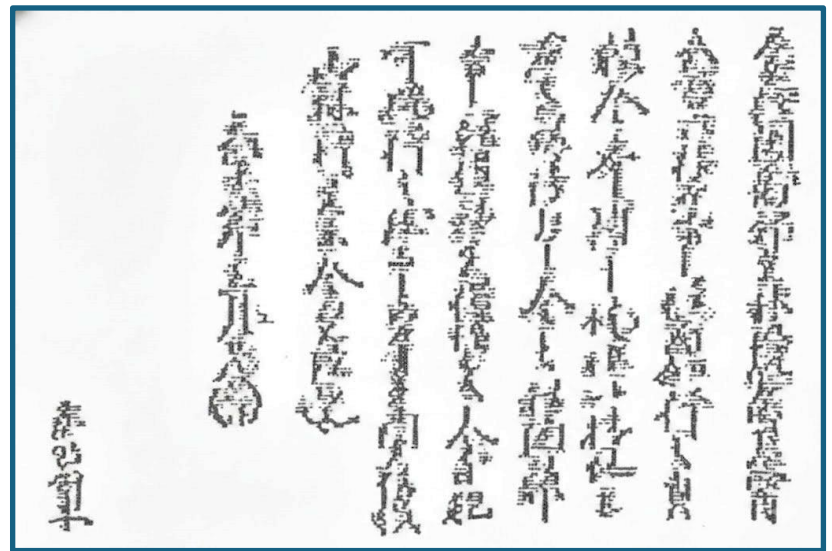
この様なことからか「風神の御鍵」は、「立田の御鍵」とも呼ばれている。

(蒲神明宮古文書より平成10年8月記)



秀吉朱印状

「秀吉朱印状」



豊臣秀吉が遠江国（現在の静岡県西部）の神主（蒲神立神明宮）に対して発行した「朱印状」
天正 18 年（1590 年）秀吉が小田原征伐を終え天下統一を確固たるものにした時期の貴重な文書。

1. 原文

遠江国蒲神立神明領、蒲廿四郷の内式百六拾石の事。当知行の員数に任せ、寄附せしめ認め。但し、検地の上を以て、右高頭之を請取り、全く社納せしむ。神事社役、禰宜供僧已下を支配せしめて、之を執行すべし。然る上は、有来の如く、門前の諸役山林竹木等、免除せしめ候也。

（1590 年） 天正十八年十二月廿八日

（秀吉朱印） 蒲惣検校

2. 現代語訳

遠江国蒲神立神明の領地として、蒲二十四郷のうち 260 石のこと。

現在の知行（領有高）の通り、間違いなく寄進した。ただし、今後の検地（土地調査）の結果に基づいて、右に記した石高を正しく受け取り、すべて神社の収入とせよ。神事や神社の役目については、禰宜（ねぎ）や供僧（くそう）以下を指揮して、しっかりと執り行うこと。その上は、従来通り、門前の諸々の役務や山林の竹木などの（課税や伐採制限を）免除するものである。

1590 年（天正 18 年）12 月 28 日

（豊臣秀吉の朱印） 蒲惣検校（かばそうけんぎょう）殿

解説とポイント

背景： 1590 年は、秀吉が徳川家康を関東へ移封し、自らの支配体制を全国に広げた年。この文書は、地元の有力な神社に対し「土地の所有権（260 石）を改めて保障する代わりに、しっかり神事を務めよ」という安堵と命令を伝えている。

検地の徹底： 文中に「検地の上を以て」とあるのは、秀吉らしい点。「今は 260 石としているが、太閤検地できちんと測り直した数値を正当なものとする」という当時の土地政策の厳格さが伺える。

諸役免除：「山林竹木等、免除」というのは、勝手に木を切られたり、余計な税をかけられたりしないよう特権を与えたことを意味します。

『高師泰 書下文』

在江國蒲河府控授清保
 中一控授城日多木上師入在
 同心忍屋敷田島中一依此心飛
 料と収る之方控授城日津役
 勤仕に地しと云い別儀為新河
 寄進可死後も清保致し同
 下河津寄進は例令津位
 下河津清保之勤に依り

康永三年七月廿七日
 高師泰

高師泰書下状 1344年

『北条時政 下知状』

下 蒲河府
 補任清保之勤に依り地頭代職力
 源清成
 右ハハ由は清保可是地行
 所務之勤に依り任令土官取
 知可達共致下
 嘉永六年六月廿一日

北条時政下知状 1197年

在江國蒲河府控授清保中一控授城日
 島中一之勤に依り清保中一之勤に依り
 勤仕の勤に依り清保中一之勤に依り
 執事代官に依り清保中一之勤に依り
 下河津寄進は例令津位
 下河津清保之勤に依り

嘉永三年七月廿七日
 高師泰

高師泰下知状 1347年

下 蒲河府
 可入早源吉社子為上河津日島
 地頭代職事
 右人任親父清倫謙状之旨為後職
 守先例可致致之勤に依り任令土官取
 知勿達共致下
 嘉祿三年十月十二日

北条時房下文 1227年

『非運の武将 蒲冠者源範頼』

「蒲殿のいよいよ悲し枯尾花」

「木枯や冠者の墓撲つ松落葉」

これは夏目漱石が四国の伊予市にある範頼の墓に詣でた時に作った句である。

「蒲殿」「冠者」とは共に範頼を指している。

蒲で生まれそだったので「蒲冠者」と名乗り、平家討伐の総大将として活躍した範頼も、兄頼朝、弟義経の華々しさの影に隠され非運の生涯を送り、ゆかり深い古里「蒲」でも忘れ去られようとしている。

大きな歴史の転換期に生まれそだち主役の座に就きながら、出生から死所まで謎に包まれ、断片的な伝承のみしか残されていない非運の武将範頼。彼については定説が無く、文献もそれぞれ異なった内容を示していて、真偽を定めることができない。

“生い立ち”

範頼は、清和源氏の嫡流義朝の六男として生まれた。母は「尊卑分脈」によれば、池田宿（磐田郡豊田町）の遊女であり、蒲御厨で生まれたとされている。

平治の乱で、父義朝は平清盛との戦いに敗れ、尾張の野間で家来にだまし討ちにされ、その子供達も平家に殺され、あるいは捕えられた。嫡男頼朝は伊豆に流され、幼なかつた義経たち三人は寺に預けられ、僧になることで命を助けられたのは有名であるが、範頼については何も語られていない。

九条兼実の日記「玉葉」には当時朝廷に仕えていた藤原範季にそだてられていたと記され、「新編武蔵風土記稿」では埼玉県吉見町の安楽寺で稚児僧となって隠れ住んでいたと伝え、「鎌倉実記」は蒲御厨の蒲家に隠れそだてられていたとしている。

この頃の蒲家の当主は源清倫で、彼は飯田の別荘(現在の龍泉寺)に住まい源氏の再興を願いながら心身の鍛練に務めていたと言われていたが、清倫の一人娘吉祥子と深い仲となり、非運の中にも楽しい青春の一時を過ごしていたのではないだろうか。吉祥子との間に生まれた女「藤姫」はその後蒲家を継ぎその子孫が現在に至っていると伝えられている。



源範頼肖像画(横浜・太寧寺)

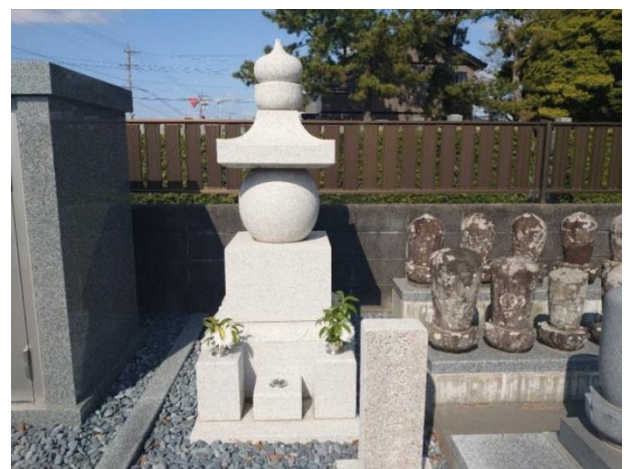
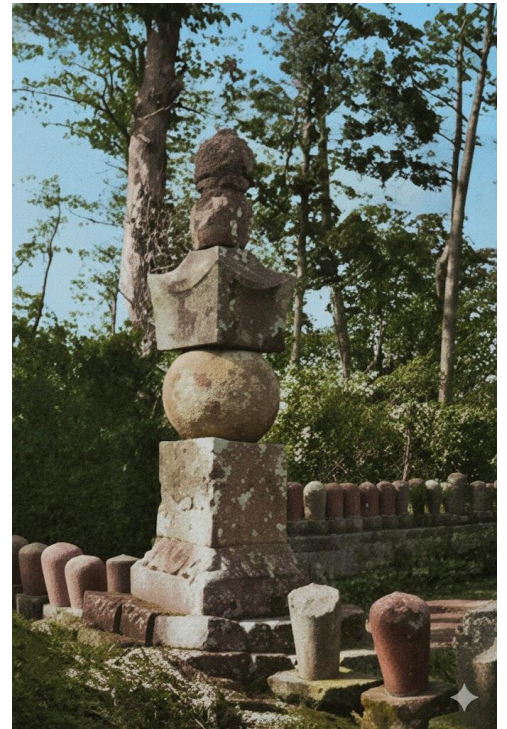
『稻荷山龍泉寺』

この境内が蒲家の別荘があった所で、
範頼はこの地でそだったという。周囲
に濠がめぐらされ、その根跡が今も残
っている。建久四年(1193年)の範頼の
死後、享徳三年(1254年)、範頼供養の
寺として開山されたものである。

所在地：浜松市中央区飯田町



『源範頼』



『源範頼供養塔』

範頼の供養塔である巨大な五輪塔。現在では平成15年に
建て替えられて、この古い塔はない。

『源範頼関係・蒲家別邸堀跡道標』



『駒塚』

この地は、源範頼公の愛馬を葬った駒塚である。範頼公は建久四年（1193）伊豆修善寺で殺害されたが、この時、愛馬は主人が幼少期から青年期をすごした懐かしの故郷に主人の首をくわえて走り回り息絶えたと伝えられている。後日、忠誠を盡した愛馬を慰霊するため、馬頭観音菩薩像が建立された。

『源範頼の別邸御茶屋跡』



寿永年間(1182~1184)、蒲冠者源範頼公がこの地に別荘を設けた。南に佐鳴湖の清風を迎え、東西をめぐらす外堀が備えられた。廓内に樹木鬱蒼として真に別邸の備えだった。範頼公はこの地に来て御茶の湯を立てられし故に、「御茶屋」と命名されたという。付近には、御茶屋跡に因んで命名された御茶屋橋がある。

現在の石碑は民家の庭の奥のカバザクラの脇にあり、以前、車が衝突し破損したので補強されて建っている。
現在は鉄骨で補強されているが、当時は針金での簡易補強だった。



今の場所

カバザク

元の場所

大正13年に建てた当時の位置は、現在地より約十メートル西北、大きな梅の木在所にあった。



『蒲ザクラ』



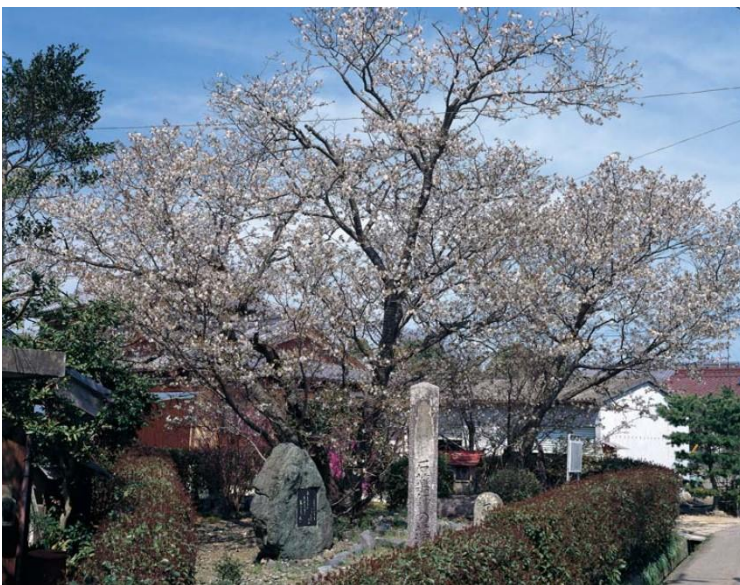
浜松市の蒲神明宮に植樹されている蒲ザクラは、「石薬師の蒲ザクラ」の後継樹。



「石戸蒲ザクラ」

埼玉県北本市の国指定天然記念物

鎌倉幕府を開いた源頼朝の異母弟である「蒲冠者源範頼」にちなんでつuitたと伝えられている。和名「カバザクラ」という品種で、ヤマザクラとエドヒガンザクラの自然交雑種と考えられる。



「石薬師の蒲ザクラ」

三重県鈴鹿市 県指定天然記念物

寿永(西暦 1182 年～84 年)の頃、源範頼が平家追討のため、西へ向かう途中、石薬師寺に詣でて武運を祈願し、戦運を占うため、鞭にしていた桜の枝を地面に逆さに挿して、『我が願い叶いなば、汝地に生きよ』と言って去ったが、活着し生長したのがこの蒲桜であるという言い伝えがある。

芳川蒲ザクラ堤は、西塚橋の南 80m 地点から赤宮橋の北 100m の範囲で、距離にして約 1km、芳川沿いに植樹されている。



『小山みい』



文政4年に生まれ、機織に秀でた才能をもっていた「みい」は、木綿の編織を研究して遠州織物を地場産業に定着させた。

従来のは、農家の副業的存在だったが、「みい」は、協力者と共に永隆社を創設し、機織を専門化した。また同時に製造・販売、弟子の養成にも尽力した。明治時代に一女性を称えた文章と共に神社に燈籠を建てるのは稀なことである。

「みい」の墓地は中島町龍島院にある。

浜松市東区役所

右側の灯籠の碑文

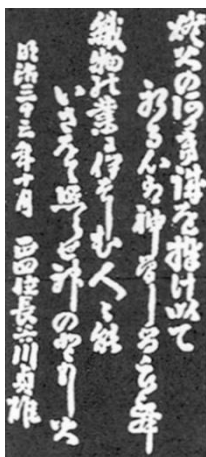
新たになりわいを起こし、多くの人に職をさずけ、家をにぎわし、国を富ます者ありと聞かば、誰かは感賞せざらん。ここに遠州上中島村小山みえという女あり。なりにし嘉永の頃(1850)手ずから木綿縞布を織り、市にひさぐ業を初めければ、近々しばらくこれに習う者いできにけり。明治の御代となりて、磯辺、遠山などほか七人の者と力を合わせ、機業の改良をはかり、ついに同業者を糾合して永隆社を組織し、粗製監造の弊を矯正し、みずから企業の拡張に励みつとめしかば、遠州木綿織の名はあまねく世に知られ、販路多いにひらけて重要な国産となりぬるは、もつとも尊くもつともめでたき事になんなりける。このたび永隆社の人々あいばかりて、石灯籠二基を蒲大神のひろまえに献こんして、いやさかえと企業の繁栄を祈りつかまつり、且は企業に力をまうせし人々の功労を永く後世に伝えまほしとて、その由を書てよと請はるるまま、喜びうべない筆とるものは長谷川貞雄なり。

明治33年10月正四位 長谷川貞雄

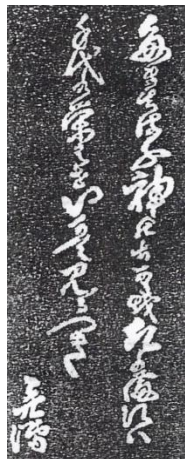


左側の灯籠の和歌

①



②



① 燈火のあかき誠を捧げ以て祈る心は神ぞしるらむ

(ともしびの赤々と輝くような私の偽りのない誠実な心を捧げて祈る、この切実な心の内は、きっと神様だけが分かっていることでしょう。)

織物の業にいそしむ人々のいさを照らせ神のともし火

(織物の仕事に懸命に励んでいる人々のその素晴らしい功績を、神の灯火でどうか明るく照らしてください。)

明治33年10月 正四位 長谷川貞雄溥

② たまちはふ神のちからをたのまずは

千代の栄えをいかで見ると

(魂を守り幸いを与えてくださる神様のお力を頼りにせず、どうして永遠に続く繁栄を手にすることができようか。いや、神の助けがなければ、真の繁栄は決して望めない。)

喜溥

社頭の大灯籠

蒲神明宮の社頭に大きな石灯籠が左右に建てられている。これは天保四年（一八三三）今から一六〇年ほど前に当時の氏子の人々によって建てられたもので、台座には寄付をした村々の名前が刻み込まれている。

現在積志地区半田町生れの小杉謙一郎は、明治七年から十六年間、蒲神明宮の祠官しかんとして奉仕したが、秋葉神社祠官として望まれた際、承認の旨県知事への提出書類に蒲神明宮の氏子四十二か村の氏子総代が連署で提出



した書類がある。当時においても氏子がいかに広域に渡っていたか蒲神明宮に対する崇敬が篤かったかを知ることができる。

この四十二か村が明治維新まで蒲神明宮の氏子として、大蒲の庄として蒲氏の支配下にあったことが分かる。

神立村 將監村 植松村 名切村 塚越村 渡瀬村 小松村 西之柳村 福増村 上飯田村 下飯田村 西傳寺村 長鶴村 青屋村 西塚村 上之御村 西左所村 丸塚村 上新屋村

宮竹村 永田村 原嶋村 篠瀬村 北宮村 端和村 薬師村 薬師新田 安問村 安問新田 干場村 龍光村 鶴見村 新貝村 東大塚村 西大塚村 安留村 庄屋村 下大蒲村

灯籠の台座に刻まれた村名

鳥居松

松は、神木として祀られたり、縁起のよいもの、めでたいものの代表とされ、「市の木」に指定され、市章も「波」と「松の字」をデザイン化したもので、私たちに大変なじみ深いものである。

江戸時代の古い絵図をみると、植松地内の東海道の街道筋に大きな鳥居が描かれている。これが今も残っている蒲神明宮の一の鳥居であり、神明宮の入口である。鳥居をくぐって少し行くと小さな川がある。ここが植松と神立との村境で、これより北は昔は神明領であった。その領界を示すため、道の両側に松が植えられ、

鳥居松と呼ばれていた。西側の松は戦後もしばらく残されていたが、いつしか伐られてしまい今はその面影を知るよしもないが、明治中期に作られた銅版画に描かれ往時をしのばせている。

今の西遠女子学園付近から北は両側に松の大木が生い茂り（学園内にはまだ松の大木が少し残されている）、殊に神明宮の西側（現在の蒲幼稚園、県営住宅付近）は、昼なお暗い松林で夕暮れ時には一人を通るのは気持ちが悪かったと言われるほど松の大木がうっそうと生い茂っていたが、戦時中飛行機燃料の代用品として、松根油を採取するため多くの松が切り倒され、根も掘り上げられてしまい、戦後は住宅地に開発されてしまったため、ごしんの森も縮小され、昔の面影は薄くなった。



銅版画に残る鳥居松

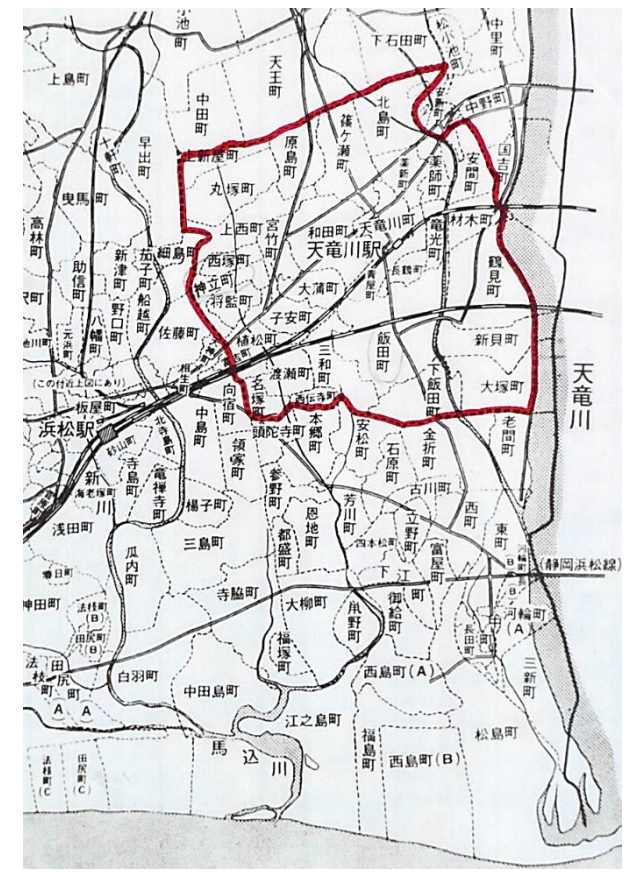
『蒲神明宮氏子 42ヶ村』

神立村 將監村 植松村 名塚村 名塚村 塚越村 渡瀬村 小松方村 西之郷村 福増村 上飯田村 下飯田村 西傳寺村 長鶴村 青屋村 西塚村 上之郷村 西在所村 丸塚村 上新屋村

神立町 將監町 植松町 名塚町 名塚町 渡瀬町 三和町 三和町 三和町 飯田町 下飯田町 西伝寺町 長鶴町 青屋町 西塚町 上西町 上西町 丸塚町 上新屋町

宮竹村 永田村 原嶋村 篠瀬村 北畠村 端和村 薬師村 薬師新田 安間村 安間新田 半場村 龍光村 鶴見村 新貝村 東大塚村 西大塚村 安留村 庄屋村 下安村 大蒲村

宮竹町 和田町 原島町 篠ヶ瀬町 北島町 天竜川町 薬師町 薬師町 安間町 安間町 材木町 竜光町 鶴見町 新貝町 大塚町 大塚町 新貝町 新貝町 子安町 大蒲町



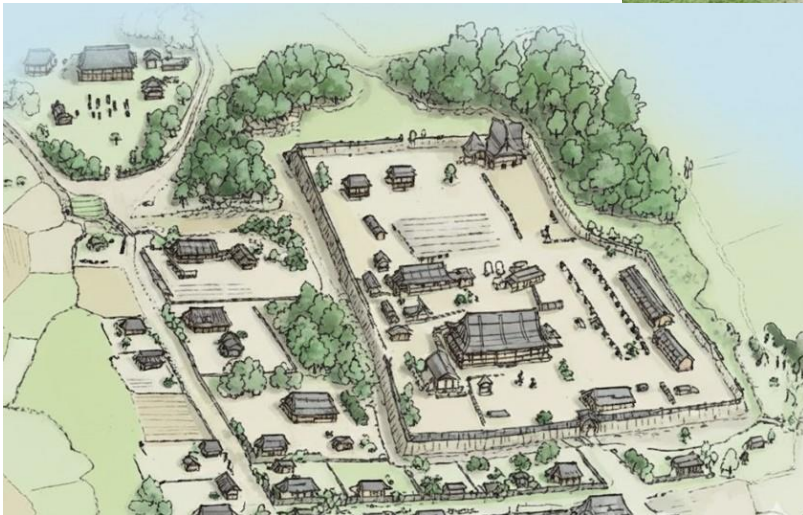
みくりや
蒲御厨領域図
24郷42ヶ村

『蒲家屋敷跡』

先方樹木の繁るは大蒲町民の昔からの住宅。手前の畑地が屋敷跡地（現大蒲公園の西方辺り）屋敷跡から北西約250mにある「光禅寺」は蒲氏の氏寺。



屋敷想像図（浜松博物館）



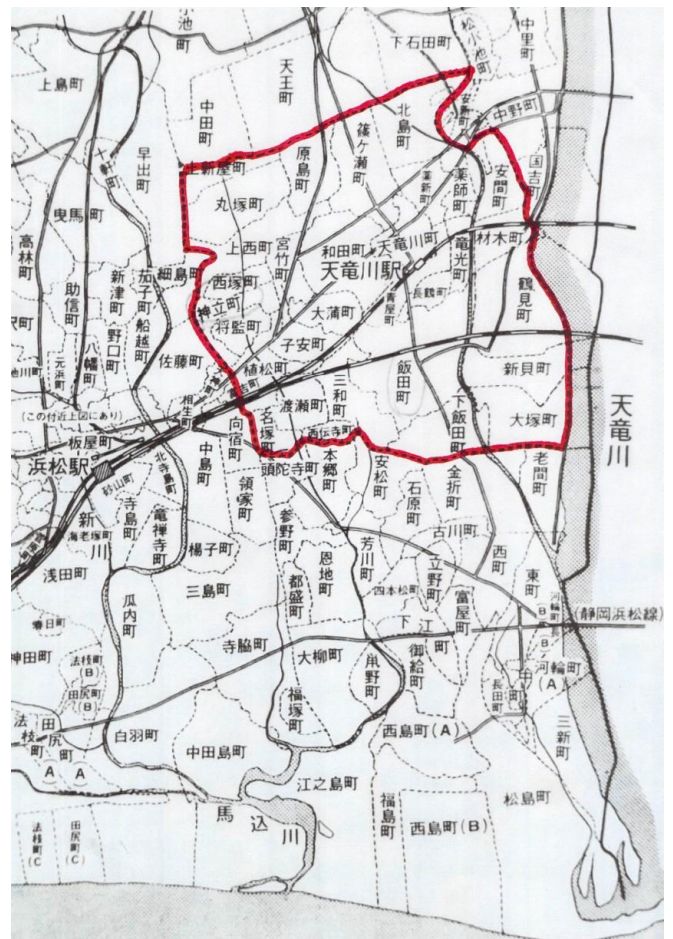
『蒲家歴代先祖の墳墓』

屋敷中央西寄りの生垣の中に歴代墳墓がある。



『蒲御厨領域図』

みくりや
24郷42村



『蒲神明宮 一の鳥居』

松は神木として祀られたり、縁起の良いもの、めでたいものの代表とされ、私たちに大変なじみ深いものである。

江戸時代の古い絵図をみると、植松地内の東海道の街道筋に大きな鳥居が描かれている。これが今も残っている蒲神明宮の「一の鳥居」であり、神明宮の入口である。

鳥居をくぐって少し行くと小さな川があった。ここが植松と神立との村境で、これより北は昔、神明領であった。その領界を示すため、道の両側に松が植えられ、「鳥居松」と呼ばれていた。西側の松は戦後もしばらく残されていたが、いつしか伐られてしまい今はその面影を知るよしもないが、明治中期に作られた銅版画に描かれ往時をしのばせている。

かつては西遠女子学園付近から北は両側に松の大木が生い茂り(学園内にはまだ松の大木が少し残されている)、特に神明宮の西側は、昼なお暗い松林で夕暮れ時には一人で通るのは気持ちが悪かったと言われるほど松の大木がうっそうと生い茂っていたが、戦時中飛行機燃料の代用品として、松根油を採取するため多くの松が切り倒され、根も掘り上げられてしまい、戦後は住宅地に開発されてしまった為、ごしんの森も縮小され、昔の面影は薄くなった。



以前は神明宮の大祭時、くさびを抜き、貫（上から2本目の横梁）を取り外し、祭りの屋台の屋根が当たらないようにしていた。しかし、手間がかかるので、コンクリートで土台をかさ上げし、貫を外さなくても屋台が通過できるようにした。

『社頭の松』

この松は、鳥居の東北にそびえていたが、残念なことに大正7年頃に枯れてしまった。
大蒲の画家・鈴木鶴仙（六軒京）によって描かれた大額が、今も社務所に掲げられてい



「社頭の松」

享保九年（一七二四）四月五日蒲神明宮の社務所において
歌会が催された。そこで境内に生い茂る樹齢一千年余の老
松が歌題に取り上げられ、最年少の政成（後の賀茂真淵）が
筆とり、

かみじやま ももえ たね
神路山 百枝の松の 種なれや

このみづがきに 茂る一木も

（あの伊勢神宮の深い緑の森を作っている神路山の沢山の枝の
種だろうが、この神明宮の垣に茂っている一本の松の木も）

続いて蒲 清兼が

いくとし こ かけ
幾年よ 此の神がきに 陰高く

ももえ
松は百枝に みどりそふらん

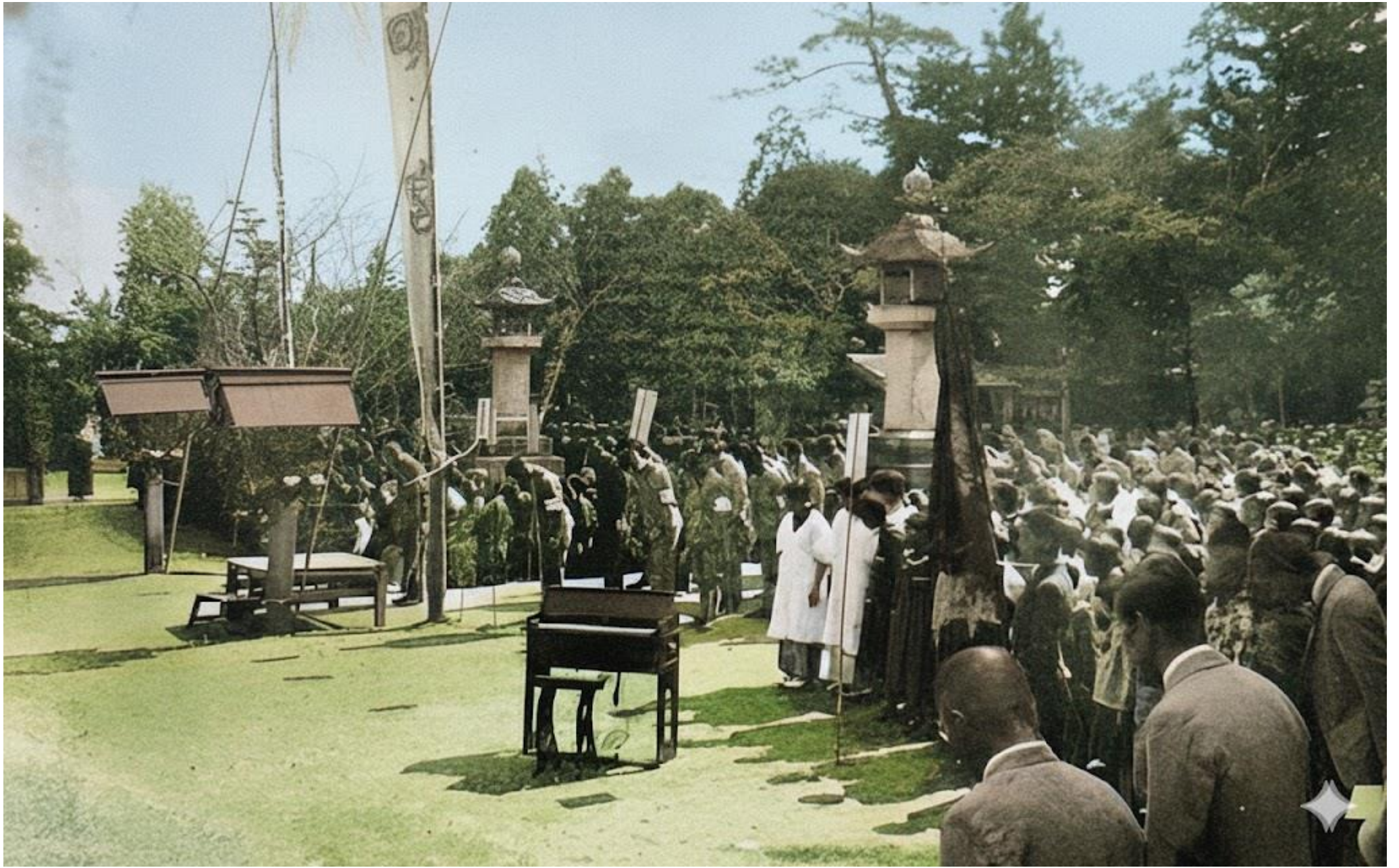
続いて杉浦 国頭（諏訪神社 神主）

ももえ
神やじる 百枝もちきの かたそきに

かけ
陰そう松の ふりにける代は

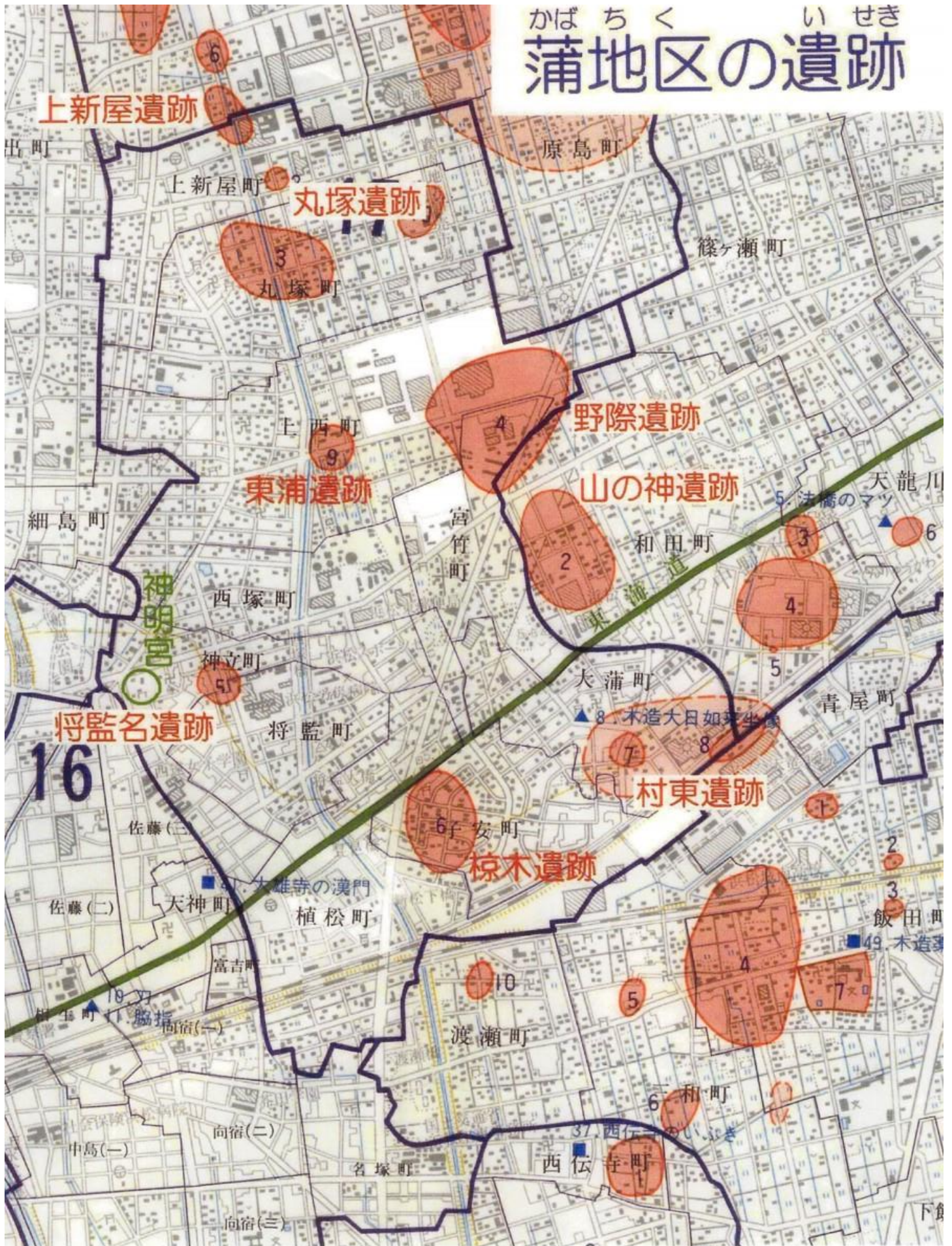


蒲神明宮：出征将士祈願祭



蒲神明宮：出征將士祈願祭

かばちく いせき
蒲地区の遺跡



蒲小学校

2005

終戦直後の蒲地区



昭和21年5月22日 米軍撮影

あとがき

「袖紫ヶ森の神々」は「蒲神明宮」や蒲神明宮に関わりの深い「蒲家」と「源範頼」に関する歴史や言い伝え、古文章、古写真で構成された文集です。

本文集は蒲協働センター・東図書館共催の講演会（2026/3/15 講師：桶田忠正氏）のプレゼンテーション資料として作成されたものです。

流用、引用した資料

- ・ 蒲神明宮古文書、関連写真
- ・ わがまち文化誌「袖紫ヶ森」浜松市立蒲公民館編
- ・ 浜松市立中央図書館「浜松市文化遺産デジタルアーカイブ」
- ・ Google マップ
- ・ その他ネット上の資料

【蒲ザクラブプロジェクト③】 蒲協働センター・東図書館 共催

「蒲神明宮の歴史と行事」

講座 そでし が もり かみがみ
袖紫ヶ森の神々

蒲神明宮の創建は、大同元年(806)年とされています。藤原鎌足の子孫、藤原静並が伊勢神宮の神託を受け、蒲の地を開拓し、伊勢神宮に「蒲御厨(かばのみくりや)」として寄進しました。そして、この地に伊勢神宮より分霊をお迎えして神明宮を創設したと伝えられており、いつの頃からかこの地域では「ごしん様」と呼ばれて親しまれています。

長い歴史を持つ蒲神明宮について、源範頼、蒲ザクラブとの関連についてもお話しします。

日時：3月15日（日）
午前10時～11時30分
場所：蒲協働センター1階ホール
講師：桶田 忠正 氏
(浜松観光ボランティアガイドの会、蒲神明宮氏子総代)

定員：50名 **無料**
申し込み：2月20日(金)午前9時～
東図書館カウンターまたは電話にて受付

浜松市立東図書館
指定管理者：味岡書館流通センター
中央区区安町309-1 電話：053-464-2081



制作 2026年3月
桶田忠正
稲垣利幸